

松村明氏著「江戸語東京語の研究」を読んで

金田 弘

先に吉田澄夫氏の「近世語と近世文学」（昭和二十七年）と

湯沢幸吉郎氏の「江戸言葉の研究」（昭和二十九年）の刊行を見、こゝにまた松村明氏の「江戸語東京語の研究」という労作を得たことは、他の時代語と異なり比較的不振である江戸語の研究を思うとき同じ道を歩む後進の一人としてまことに喜びにたえない。

たしか昨年秋のことだったと思うが、国語学会で中村通夫氏の「江戸ことば」と題する講演があった。その中で氏は、研究の対象である「江戸ことば」の捉え方について触れ、今までの研究者たちの立場は大きく分けると一つは町人階級の間に行われたことばとするもの、一つは町人・武士階級に行われたことばとするものの二つになるということを述べておられたと記憶している。たとえば、吉田澄夫氏は後者の立場に立たれるが、それについて次のように述べておられる。

江戸語・江戸言葉といっても、武家社会の言葉と町人社会の言葉とは、その成立事情からいっても発達の経過からみてもかなりの相違があったが、時の経過に従って、両者は融

合の一端をたどった。（日本語の歴史—江戸時  
代の国語—二〇〇頁）  
前者の立場に立たれる方としては湯沢幸吉郎氏が挙げられるが、それを示せば次のようである。

士農工商の階級制度の確立した時代に、社会の最上位にあるから、武家言葉の軽視すべからざるは言うまでもない。けれども太平が続くと、経済的生活がもつとも重要な意味をもつ世の中となり、従ってその富の力においても、またその人数においても、はるかに武士をしのいで居た町人は、社会組織の主要分子となっていたと見るべきである。この見方からわたくしは、江戸に行なわれた言語の代表的なもの、すなわち江戸言葉は主として町人の間に行なわれた言語であって、武家言葉は、武士という一階級に用いられた特殊な言語と解するのである。（前掲書一）  
（一三三頁）

これによって両者の差異は武士階級に行われたことばを江戸ことばに含めるか否かあるとみてよいだろう。しかしこのことはまた、江戸語を研究する当事者の間において、江戸語を江戸語たらしめた真の実体の究明がいまだに明確に把握されていないことをも物語ってもいよう。研究の対象となる江戸語に違いがあるこ

とは、そこから導き出される結果に相違があることはおのずから明らかである。案ずるに先にも述べた江戸語研究が比較的不振ということとは、このような江戸語そのものゝ実体がどのようなものかについての学問的共通理解が定まらず、また、きわめてあいまいなまゝに今日まで放置されて来たためと考えられるのである。

このような意味において松村氏の「江戸語東京語の研究」はおおいに期待が持たれたのである。

## 二

本書での江戸語の捉え方を見るに、従来の一般論的な江戸語観と異なり、江戸人の江戸語意識を中心とし、それを実際の言語現象と結び付けて具体的に描き出した点に特色がある。すなわち、「浮世風呂」(文化六一〇年)の中で三馬が使用している「江戸詞」という語をとりあげ、それは、いわゆる「狂言田舎操」(文化十年刊)でいう「江戸訛などに相当するようなことばを指しているようであるが、江戸語あるいは江戸言葉という語をそのような狭い範囲のことばだけを指すものと規定するのは適切を欠く」とされ、「江戸語あるいは江戸言葉という語は、必ずしも江戸訛といわれる類のことばだけを指しているのではない」と述べその例として、ガラタマ先生口授の「英美会話訳語」(明治元年刊)を挙げて次のように論証しておられる。その書の「附言」に記されている「江戸の方言を以て記し」ということばを引き、この書の中に見られることばが、遊ばせことばのようなものでなくまた江戸訛のようなことばづかいでなく、「夢酔独言」(天保十四年成)などに見られる武士階級の人々の日常語に近い性質のも

のと認められることから「江戸の方言」とは武士のことばを指す。したがって、江戸語には、武士階級のことば、いわゆる「狂言田舎操」でいう「本江戸」も行われていたとされ(一五・一六・四七・八八)、次のようにまとめられる。

江戸語においては、本江戸とか旗本言葉とかいわれるものから、江戸訛とか町人言葉・職人言葉とかいわれるものまであって言語現象の上にもいろいろな様相をもっている。(七三)

総じてこのような氏の江戸語についての見解は、今までのそれに比べてより具体的であるものゝ、それは、先学が江戸語の性格を説くに用いてきた「狂言田舎操」にもとづいてそれを具体的に展開したものと云いかえることもできよう。(それは「本江戸」といい、「江戸訛」ということばが示すごとく三馬の「狂言田舎操」中の記述がその大もとのよりどころとなっているからである。)しかし、まだ、その焦点ともいふべき武士ことばについては十分いゝつくせたとはいえないのではあるまいか。なぜなら、氏の論証のあとをみて次の三つの難点が数えられるからである。

- 1 ガラタマの(1)「英蘭会話訳語」(一八六八)での言語事実を(2)「夢酔独言」(一八四三)にあてはめ、それをさらに(3)「狂言田舎操」(一八一三)に結びつけているが、(1)と(3)の間には半世紀の時間的開きがあること。
- 2 右の(1)は滑稽本、(2)は自叙伝、(3)は会話書とそれぞれ資料として異質なものであること。

3 「田舎操」の記述を大もとのよりどころにしておられるが、それにあらわしてあるような意識を当時の一般の江戸市民が抱いていたかどうか。他にそれを論証する資料のない現在、三馬個

人の考えとも（上方ことばに対抗させるための作意とも）とれないことはないこと。（この書が三馬の門人楽亭馬笑との合作ということも忘れてはなるまい。）

なお、氏の江戸語についてのお考えは文化期を中心としておられるが、それ以前の江戸のことばはどうであったのか。それを江戸語として認めるのか。そのような種々相もっている江戸語の性格はどのようなようにして生成されてきたのかという、江戸語を江戸語たらしめたものゝ真の实体はなにかをめぐっての明確な説明がみられなかったことは残念である。氏は東京語を東京語たらしめたものはなにかについてを究明し、さらに東京語発展のありさまを明らかにしておられる。江戸語についてもその究明がなされない限り、問題の焦点である武士ことばの江戸語における正当な位置づけもなされないのではなからうか。なおまた、本書において述べられた武家ことばが町人ことばとの間にどのような異同があり、両者はどのように融合して行ったかについて言語事実の面からももう少しつっこんだ説明をしていただきたかった。

### 三

ところで、本書は松村氏の十数年来の主として江戸語から東京語へかけてのご研究の集大成である。ここに昭和十七年以来、雑誌・講座などに発表された十三篇の論文が三部に分けて収載されている。いま触れた江戸語についての論考はその第一部で、概論的のものを主とした(1)「江戸語・東京語序説」(2)「江戸語の諸相」(3)「江戸語から東京語へ」のほか(4)「明治初期の口語」(5)「東京語の成立と発展」(6)「東京語の実態」などの諸篇が収められている。

第二部は各論的な細かな問題を取り扱った(7)「江戸語における語連接上の音韻現象」(8)「江戸語における連母音の音訛」(9)「水を飲みたい」という言い方について(10)「ませんでした」考、第三部は現代語の助詞に関した(11)「主格表現における『が』と『は』の問題」(12)「助詞の異同について」(13)「の」の一つの用法について」からなっている。

これらの論考は、江戸語・東京語の研究を一つの川の流れにたとえれば、その流れが、松村氏の手によって、いちだんとその深さをまし、その川幅をましたという感をいだかせる。すなわち氏自ら「はしがき」で特に第一部のものについて「主としてこれまでの江戸語・東京語の研究成果の上に、多少の新しい見解をまじえてまとめたもので、先学の諸業績に負うところのもっとも多い部分である。」と述べておられるが、それは謙遜の辞としても、その先学の研究に肉付けをほどこし、それとともに、氏独自の見解をも付け加えられた功績は多とすべきである。

### 四

では次にそれらのうち、特にめぼしいと思われる点をいくつか项目的に取り上げ、それについて気付いた点を述べてみよう。

1町人ことば——関係論文(1)・(2)・(3)・(7)・(8)

とかくいままでは、町人ことばというものは武士階級に対する町人という一つの社会的な集団において行われることばとして取り扱われ、その集団の中におけることばの差異ということには目が注がれていなかった。(山田正紀・江戸言葉の研究・浮世風呂・浮世床の語法、湯沢氏・前掲書など)また、認めていてもそれ

を具体的に言語事実の面でもらえて指示することはなかった。(吉田氏前掲書など)これは本書において、氏が「浮世風呂」からそこに出場する町人たちのことばを取り上げ、「同じ江戸の町人のことばにも、上品なことばづかいのものからぞんざいなものまで、かなり性質の異ったものがあつた」(1)・一三べ、(2)・四六べ)事実を明らかにされたのをもってはじめとする。これは結果的にみて三つの成果をもたらしているものと思われる。

(一) 前述の氏の江戸語に対する見解——特に町人ことばについて——がこのような位相の具体的な解明という裏付けの上になされていること。

(二) いままで多くのの人によって説かれてきた江戸語の音韻現象を「浮世風呂」「浮世床」を使って精細に、克明に記述された力作「江戸語における語連接上の音韻現象」ならびに「江戸語における連母音の音訛」の二論文の上に十二分に生かされていること。一例を挙げれば、江戸においては「ai」という連母音が「e:」となる現象は今まで一般的な現象——江戸語の特色とするのがふつうであつた。しかし氏はこれを次のように見ておられる。

これは下層社会の下品でぞんざいなことばにおいては特に普遍的であつた。町人社会でも上品な、あるいはいいねいなことばづかいの場合には「ai」という連母音をそのまゝ保つて発音していた。江戸語においても、旗本・御家人などの武家言葉やいわゆるお屋敷言葉などとなると、「ai」という連母音をそのまゝ保つて発音するのが一般であつた。(8)・二

一六べ)

(三) 江戸語から東京語へ移行行く言語現象の解明に有力な寄与をなしていること。(三)の現象を例にとれば次のようである。

今日の東京語ではこの現象はごく特殊な現象として存在するだけである。そこで、江戸語から東京語への変遷の一つの事実として「ai」↓「e」の現象の減退ということが考えられることになる。しかし、これは、AがBになつたというようなものではない。むしろAbがaBになつたというように考えるほうがやや事実に近いと思われる。(3)・七二—三べ)

こゝに本書の特色の一つがあると思う。これについての基調をなす考え方には異存がない。たゞ、さきに挙げた二論文について云うならば、そういう現象のあらわれない面をもとりあげて、あらわれているものとの差異を、もっと全面的に明らかにしていただきたいかと思ふのである。

2 和英語林集成の活用——(3)・(5) (8)

江戸語と東京語との違いという点でよく取りあげられる項目の一つに語彙の相違ということがある。その研究が近時行われつゝあるがまだ一斑の傾向を示すにすぎない。氏は今まで英学史的な面で貴重とみられていたヘボン氏の「和英語林集成」の主として第二版(明治五年・一八七三)・第三版(明治十九年・一八八六)を用いて江戸語から東京語へ移つての新旧語彙の実態を明らかにされた。またそれだけでなくこの書を用いて、日本語全般の上から眺めた江戸末期における江戸語の位置を(第二版、さらに明治初期の東京語(第三版)の推移を描き、特に、第三版において多くの語彙が増補されている事実を認め、東京語の形成期の裏付けをしていることは注目してよからう。

なおまた、江戸語における「エ」の音が、単純な母音でなく「je」ではなかったかという従来の疑いについて、この書や他の会話書をあたって、「エ」の基本的な発音が母音「e」であり、場合によって「je」のような発音はみられたにせよ、音韻としては「e」ととるべきことをも証しておられる。(8)・(二三五六)

### 3 東京語の時代区分——(5)・(6)

このことについては、中村通夫氏がすでに触れておられることだが(東京語の性格)、現今の東京語に至るまでの発展の実態をその特色により時代区分されたのは氏がはじめである。それは、(一)東京における都市としての発展・変貌の様相、(二)言語的事実の推移という二面から次のようにしめしておられる。

第一期 明治前期〔形成期〕(明治の初年から明治十年代の終りまで)

第二期 明治後期〔確立期〕(明治二十年代の初めから明治の末年まで)

第三期 大正期〔完成期〕(大正の初年から大正十二年九月の大震災まで)

第四期 昭和前期〔第一転成期〕(大正十二年の関東大震災後から昭和二十年八月の終戦まで)

第五期 昭和後期〔第二転成期〕(終戦後から今日まで)

穏当な区分であり、また示唆される点も多いが、なにか全体的にみて平板的にすぎるきらいがないでもない。それは、右の表においても察しられようが、結果的にみて、(イ)、(ロ)の面より(ハ)的面に重点がおかれており、(イ)、(ロ)についても、各期の実際の言語現象よりも、言文一致・口語文や学校教育の普及という言語的事

実にとらわれすぎているためではなからうか。たとえば(イ)について示せば次のようである。

(明治)前期の終りの明治十八年ごろから今期の初めの明治二十二年にかけての間は特に人口の増加がいちじるしくめだつたといわれ、東京の都市としての発展の上からも一時期を画すると見られる。(九七)

また各時期の言語現象をとらえるにもいさし少し差異ということを強調していただきたかと思う。新しい傾向の担い手への目を注がれず、古いことばの担い手をもかえりみていただきたか。文中に扱われている敬語の「れる」「られる」が口語文典の影響によって、東京語に入りこんでくるということはいいが、その当時、それ以前、それ以後の時期において、社会層、年令層、男女間、文字・音声言語の面でどういう状態を示し、どのような差異があったのか、他の敬語表現と連関させて明らかにしていくような方法がとられてはしなかったかと思うのである。そこに江戸語になく東京語にだけ見られる言語現象の特色がはっきり特色として打ち出されるばかりでなく、東京語の発展あるいは転換して行く姿もとらえることができ、その区分も言語現象の上からみちびきたすことができるのではあるまいか。(ロ)に挙げたことがらなどはその要因裏付けにすぎないかと思うのである。(この論文は多少改められて「日本語の歴史」(昭和三十二年六月刊)の中に——現代語の成立と発展——として収められている。)

4 新資料の紹介とその活用——(4)・(10)

明治初期の口語の新資料を多く紹介し、それによっていくつかの新事実を明らかにしておられる。明治十年代というのは、これ

まで言文一致運動前という意味においても重要な時期であるにもかゝらず、東京語史の上でもっとも不明な時期であった。本書に挙げられた「沖繩対話」（明治十三年）によって、共通語としての東京語の姿を知ることができ、その一つの手がかりを得たことは幸いである。また一連の会話書、ウエンリイト「商用会話」（文久元年）、生産会社の「英和通信」（明治五年刊）、エヴラー「日本語教本」（明治七年刊）などという新資料を挙げ、明治初期の口語の様相を知るに活用しておられるが、これらは、今後その当時のことばを探る人の必ず参考とすべき資料となろう。このうちの「英和通信」によって「ませんでした」が今まで古い例として挙げられるときよりも一年前の明治五年にみられるという新事実を明らかにし、「ませんでした」という形が東京語になってから発生し発達したということをこういう会話書を中心としていっそう確実にしておられる。

およそどんな研究にもとりたてれば、多少の瑕瑾はまぬがれがたいものであるが、本書もその例外ではあり得ない。たとえば特に目についたものを挙げれば次のようである。

1 「狂言田舎操」は引用文として、(1)・(2)・(8)などに見られるがそれぞれに細かいちがいのあること。また(1)の文中の「ちゃんとして」は「しゅんとして」ではなからうか。

2 「江戸語における語連接上の音韻現象」の引例のうち「浮世風呂」前編からのものを、この論考のテキストとした天保十三年刊より古い文政三年の再補刻本（中村氏校訂の日本古典文学大系本はこれによっている）によって調べたところ、次のような

違いがみられた。

(イ) 「トワ」↓「ター」の例としての「事ア」が「事ア」（一四四）

四六）

(ロ) 「イワ」↓「ヤ」の例としての「酔ヤしねへ。コレ酔やしねへ」が「酔やしねへ。コレ、酔ヤしねへぞ」（一四八六）

(ハ) 「コトダ」↓「コンダ」の例としての「事だてナ」が「事だてナ」（一九〇六）

この三つはいずれも、その現象を示すのにこの用例しか挙げられていないものである。特に(イ)については文政本の例が正しいとすれば、その「トワ」↓「ター」の音韻現象はどう扱つたらよいのであろうか。このような用例が他にあるのかどうか、本論考においては示されていないので明らかでない。これを思うといろいろ挙げた音韻現象も各項目ごとにその用例の使用度数を示していただきたかったことが、前述のそういう音韻現象のあらわれないものとの差異という点からも強くのぞまれるのである。

地理調査所の五万分の一の地図をみるとよくその左端に明治何年何月何日ということばの下に、大正何年・昭和何年と細かく修正した年月の書いてあるのをみかけます。本説一説後感じたことは、ちょうど、自分がよく知っている地区のこういった地図を読みとるときと同じで、先学の手によってなされた測図の上に、松村氏によって、新たな多くの修正がなされ、整えられたという気持です。本書のはしがきで氏は「十数年間の模索を通して、今、ようやくにしてその研究にわずかな曙光を見出した思いである。本書を一つの出发点と

して、わたくしは、この種の研究を、今後さらに進めていこうと思つている」と述べておられます。氏のこれからのご研鑽をねがつてやまない幸いです。

江戸語の研究を志す者にとつて本書の刊行がまことに大きな喜びであることは前にも述べたとおりです。またそれがために浅学の身をかえりみず、本書を読んでの疑問・不満なところを思つたまま、感じたままに申し述べてしまいました。中には誤解にもとづくところもあるかもしれませんが、あるいは失礼なことばを述べたかもしれない。また、江戸語・東京語を中心という気持が強く働いていたので、(9)・(11)・(12)・(13)については触れられませんでした。(9)については山田巖氏がその源流について言及しておられる。言語生活・七十二号)その点はなにとぞお許しねがいたいと存じます。

(昭和三二・一一・一〇)

(東京都千代田区神田神保町一―一七・東京堂 一九五七年四月発行 A5 三六〇頁・七八〇円)

―東京学芸大学付属高等学校教諭―